

パートタイムだからできる 大胆な社会実験の場

認定特定非営利活動法人 Living in Peace 代表
慎 泰俊 氏

社会人が本業を他に持ちながら、社会貢献をしていくモデルを作ろうと、慎泰俊さんが Living in Peace をスタートさせたのが 2007 年。「機会の平等を通じた貧困削減」をテーマに掲げ、発展途上国では「マイクロファイナンスプロジェクト」を、国内では「子どもプロジェクト」を展開。新しいボランティアの形を追求し続けている、そのパワフルな活動について話を聞いた。

入会を難しくすることで ボランティア継続が可能に

— Living in Peace をスタートさせて 9 年目ですね。現在はそのような活動をされているのでしょうか。

慎 2 つのプロジェクトを運営しています。ひとつが「マイクロファイナンスプロジェクト」で、だれもが金融サービスにアクセスできる世界を実現するため、途上国でのマイクロファイナンスを支援しています。

現在は、カンボジア、ベトナムなどでマイクロファイナンス機関に投資

するファンドを企画したり、調査研究を行っています。

— もうひとつが国内での事業ですね。

慎 はい。「すべての子どもたちにチャンス」を合言葉に、虐待や病気などが原因で、親と暮らせない子どもたちの社会的養護を支援しています。

— 現在、一緒に活動しているボランティアは何人くらいですか？

慎 全体で約 70 人です。2 つのプロジェクトに、ほぼ半数ずつが関わっているというイメージ。学生もいますが、基本的に全員が本業を持っています。平均年齢は、私よりちょっと下で約 31 歳。最高齢は 64 歳の退職された方です。

— みなさん、プロボノ的なボランティアになるのでしょうか？

慎 プロボノというと、比較的短期で、何かひとつのプロジェクトを仕

上げていくというイメージだと思います。専門性がなくてもできることもありますし、Living in Peace は、少なくとも 3 年くらいは関わってもらう形で参加してもらおうのが、入会の条件です。

— 専任の事務局長などがないという団体で、運営や連絡、メンバーとの意思疎通などはどのように？

慎 基本的にチャットとメールで済ませていますよ。片方のプロジェクトでは各分野でチャットが立ち上がっていて、ツイッターのように「@」をつけて、自分に関係するものだけが読める。もう片方のプロジェクトは、メールが主な連絡手段で、だいたい 10 時間に 20 通、多いと 100 通くらいのメールがやりとりされています。その他、毎週土曜日に定例ミーティングがあって、6 割くらいのメンバーが出席。私も出席しますし、海外にいる場合はスカイプで参加することもあります。

— 定例会があるとはいえ、普段はメールだけ。意見の行き違いなど、



トラブルはないのでしょうか。

慎 今、30歳以下の人たちは、普段から電話などでなく、チャットで済ませる人が多いんです。特に問題はありません。ただしリモートだけだと、やる気が薄れてくる部分があります、そこはミーティングが必要ですね。

—参加当初はやる気があっても、だんだん薄れてくるということもありますよね。

慎 そういう意味でいうと、設立か

ら3年目が転機でした。勉強会としてスタートした当初は、「来る者拒まず、去る者追わず」。すると、長続きしない人も出てきます。初めて来た人に対応する労力も大きいし、せっかく入ったものの、3ヶ月で辞められてしまったのは、残されたメンバーのモチベーションも下がる。特にマイクロファイナンスの投資ファンド立ち上げなどでは、ある程度の期間は働いている人たちが構成しないと、ものごとは進まない。

そこで参加するには、3、4回はミーティングを見学し、志望動機書を提出していただく。その後、メンバー5人から推薦を経て、理事承認という手続きを取ることにしました。

—参加する「覚悟」が必要ですね。それだけハードルが高くなると、メンバーの減少という危機もあるのではないのでしょうか。

慎 はい、それはありました。しかし「人数×一人ひとりのコミットメントの度合い」が組織の力だと思っていて、人数だけではない。入会の

ハードルを上げると、30人が10人になるけれど、活動をまじめに続けていけば、次第に関心を持つ人が増えて、また30人に増える。そこでハードルを上げると減るけれど、また増えてくる。結果的に幽霊部員が減りました。

ボランティアだからこそ 変化のスピードに対応できる

—慎さんが、パートタイムによるボランティアメンバーでのNPOにこだわる理由は为什么呢。

慎 NPOは、ある意味、社会実験というか、問題解決のためのモデルケースを作るのが役割だと思っています。自分たちが「こうあるべき」と思う形で実際に事業を作ってみる。うまくいったら、それを宣伝して政策変更等に反映されるまでやり続ける。特に私たちが手がけているマイクロファイナンスや子どもたちの社会的養護については、非常に変化のスピードが速い。

例えば、ちょっと前まで子どもたちの社会的養護の支援といえば、児

児童養護施設が対象でした。しかし、今では里親を増やすとか、子どもが一時的に保護される一時保護所の状況改善などが、世の中では求められていて、我々が先鞭を付けるべきものも変わってきています。

―状況に応じて、臨機応変に活動をシフトしていく。そのためにもボランティアによる運営が重要ということですね。

慎 そうですね。人を雇用すると、まず「いる人」をベースにやるべきことを考え、その人に何をしてもらおうか、という発想になってしまふ。それは戦略として誤っていると思います。しかし、だからといって、人を大切にしないということではありません。

NPOのように社会課題解決にフォーカスしている組織は、社会課題がどう変わるかによって、戦略やポジションの取り方を、次々と変えていかないといけない。より柔軟に組織を運営するためにも、パートタイムであることが有利だと思います。

大勢の人の心を動かし 世の中を変えていきたい

―「Living People」で取り組んでいる「子どもプロジェクト」の寄付プログラム「チャンスメーカー」は、現在までに約5000万円もの寄付金を集めています。これまでに2カ所の児童養護施設の建て替え支援を行い、施設出身者を対象にした返済不要の奨学金も行っています。

「すべての人にチャンスを」という活動の思想が、非常にはっきりしていますね。

慎 私は今も昔も朝鮮籍で、パスポートも持っていません。バックグラウンド的に機会の平等について、問題意識を持つ余地がある訳です。また中学、高校では先輩との関係が悪く、生意気だと言われて殴られることもありました。年上を尊敬するということはあっても、やはり人は生まれながらにして平等だということを、身に染みて思うことができました。

―だからでしょうか、大学時代は人権弁護士になりたかったとか。

慎 はい。それで人権運動に参加しました。しかし、当時、私が参加していたデモや集会にいた人たちの振る舞いを見ると、難しい言葉を使い、そこにいることに満足しているだけの人が、少なくない印象がありました。

私のいた高校は不良少年がいっぱいいて、土日はパチンコで、暴走族とケンカもする。もし社会変革が実現するとしたら、私の当時の同級生が理解でき、共感を得られるものであるはずだと考えていました。ですが、私の参加していたデモや集会ではその実感がなかったのです。世の中を変えるということは、大勢の人たちの心に響かなければ意味がない。もちろん、私の経験は限られたものですので、たまたま私が出会った活動がそうだっただけかもしれないませんが、この経験を通して、別の方法で社会変革に挑戦したいと思うようになりました。

―社会によりわかりやすく訴える



方法が必要なんです。ね。

慎 坂本龍馬が亀山社中を作ったように、ビジネスの方が、社会変革に近いところにいるのではないかと考えて、金融の世界に入り、投資の仕事に関わってきました。20代で修業・勉強をし、30にして立つ、ですね。

「10年後に自分でファンドを作り、1000億円の規模でいるんな

会社に投資し、その会社を変革し、私は世の中をよくする」というプログラムを23歳のときに書きました。少し

恥ずかしいのですが、まだ残っています。結局起業はしましたが、規模は当時宣言したものにまだ及んでいません。

—そして勉強期間である20代で

「Living in Peace」を立ち上げ、社会課題への取り組みをスタートさせました。

慎 20代後半になるにつれ、職業人としての

準備度合いが高まってきたのに伴って、社会課題に対して取り組みを増やしていった、という状況です。

今30代になって、プロフェッショナルとしてのスキルは身についたので、実際に社会へのインパクトを出す方向に注力するフェーズになっています。

世界中の人に 金融アクセスを提供する

—慎さんは2014年にマイクロファイナンスを行う新会社、「五常・アンド・カンパニー株式会社」を起業されました。ソーシャルビジネスを本業とした訳ですね。

慎 「Living in Peace」では3、4000万円程度の金額を3年間くらいの期間で投資し、返済してもらえないタイプのマイクロファイナンスを扱っていました。

五常・アンド・カンパニーでは現時点で12億円ほどの資金調達を行っています。株式を通じて資本金として集めたお金で、マイクロファイナンス機関に資本参加したり、自分たちで一から作ったりもしていて、「Living in Peace」のマイクロファイナンスとは、まったく異なる形で、完全に棲み分けしています。

—五常・アンド・カンパニーの目指すところは？

慎 30歳のとき、中国で開催された



「サマーダボス」(世界経済フォーラム「ニュー・ワールド・チャンピオンズ年次総会」の通称)に参加しました。その時、ピーター・シュワルツ(※1)さんが出席していて「世界経済フォーラムは民間で作った国連である」と言ったのを聞いて、なるほどと思いました。

世界政府があったとしてそこがやる仕事を、個人の事業活動で担う時世になっている。実際、グーグルやフェイスブックはそういう存在になっています。それなら自分は何をしたいのかを考えたとき、民間版の世界銀行の仕事をしたいと思っただけです。具体的に言うと、現在、世界で25億の人が金融アクセスを持っていない。この現状を根本的に変えたいと。

—個人で世界銀行を実践するというのは、壮大な夢ですね。

慎 すべての人が生まれたときの状態に関係なく、自分の力で自分の人生を勝ち取る世の中を創りたいというのが、私の昔から変わ

らないテーマです。そのテーマを実現するのに金融を仕事として選んだ以上、自分の準備段階に応じて、やらなければいけないタスクが決まってくる。

機会平等を達成するための第一歩として、金融アクセスが必要です。自分が生きている間に、せめて世界中で金融アクセスが当たり前のものになるようにしたいと思っています。現在はカンボジア、ミャンマー、スリランカに子会社があり、従業員は230人。2020年くらいまでには、アジア主要国のすべてに拠点を置き、2030年には民間の世界銀行と呼ばれる存在にしたいです。

—成功の見通しは？

慎 世界70カ国に拠点を作り、現地の企業経営者と信頼関係を結び、素晴らしい会社にし、金融サービスを提供するという仕事は、やるうとしたらできる。宇宙工学に挑戦し、火星に人を移住させるほうが、よほど難易度が高い

んです。みんなが大変だと思ってやらないことを、まじめにやり続けたら、きっとできるはずですよ。

—やり続けるといえば、慎さんは本州縦断1648キロメートルなどのウルトラマラソンに挑戦し、自らの心身を強烈に鍛えていらっしやいます。それはいわば、起業後に必要なメンタルを鍛えるためでしょうか。

慎 そうですね。どれだけ辛い状況でも、長距離を走るには、毎日、決めたことをやりきるのが完走に一番必要です。こういう継続の力は、平常心を養うのに役立ちました。人間には名誉欲、性欲、金銭欲などさまざまな欲があり、そこに飲み込まれてしまうと正しい判断が下せなくなる。金融の世界では判断がとんでも重要な要素ですから、快不快から距離を置く必要があります。

自分の心に「さざ波」が立たない状態を作ることが大切で、長距離を苦しみながら走るの、心

しん・てじゅん

1981年東京都生まれ。朝鮮大学校法律学科卒業。早稲田大学大学院ファイナンス研究科修了。モルガン・スタンレー・キャピタル、ユニゾン・キャピタルを経て、2014年に五常・アンド・カンパニー株式会社を設立。2007年に認定NPO法人Living in Peaceを設立し、2009年には日本初となるマイクロファイナンス投資ファンドを企画。国内では、親と暮らせない子どもの支援に取り組み、児童養護施設新設のための資金調達支援、就学資金支援、政策提言活動などを行っている。

<http://www.living-in-peace.org/>

の訓練として効果的だったと思いま
す。

大胆な社会実験を 今後も続けたい

「本業で社会的課題解決に関わるよ
うになっても、Living in Peaceの
活動も変わらず続けていく予定す
か。活動の内容に変化は、あるの
でしょうか？」

慎 起業家のイーロン・マスクはス
ペースXとテスラ・モーターズ（※
3）の両方を経営しています。だっ
たら、会社とNPOのふたつくら
い、やればできるでしょう。

まずマイクロファイナンスに関し
て言うと、クラウドファンディング
やインパクト投資は、もはや新しい
手法ではありません。先進国から発
展途上国へお金を流すやり方を、根
本的に考え直すことをやりたい。本
業の方では、あまり危険なことでは
ないのですが、NPOでは、大胆
に社会実験ができると思います。

「子どもの育成分野では？」

慎 私は今でも児童養護施設に年間
7回くらい泊まり込んでいますし、

母子家庭などを訪ねてヒアリングを
し、高校中退で施設を飛びだして行
き場のない子どもを、預かったこと
もありです。家庭、児童相談所、社
会的養護の現場感も含めて問題がわ
かってきて、この分野でやらなけれ
ばならないことの優先順位や「どう
やるべきか」というビジョンが、見
えてきたと思っています。

社会的養護全体において現在一
番問題があるのが、一時保護所（※
2）です。突然、居住していた地域
から切り離され、学校の友だちにさ
よならも言えないまま、児童相談所
内の保護施設に連れて行かれる。こ
れは子どもにとって非常に辛いこと
ですよ。

その子どもが住んでいる地域に、
里親やファミリーホームがあれば一
時保護委託ができ、子どもは地域の
中で育つことができる。それが本来
あるべき姿だと思っています。都市
部では実現が難しいかもしれませんが
、できる地域から実践する。今後
も子どもの支援はライフワークとし

て続けるつもりです。

「すべての人への機会の平等」を
生涯のテーマに、パートタイムで
NPOを始めて、いま本業とNPO
が両輪となってゴールを目指してい
らっしゃる姿に、圧倒されました。
本日はありがとうございました。

インタビュアー 本誌編集担当 近藤尚子
「2016年8月31日 慎泰俊氏オフィ
スにて」

※1 セールスフォオースの創業者で、未
来を複数のシナリオとして描き出し、
不確定な未来に対して洞察力、対応力
を高める「シナリオ・プランニング」
の専門家。著書に『シナリオ・プラン
ニングの技法』など。

※2 虐待などが原因で緊急保護された
子どもを一時的に保護する施設。一時
保護の期間は2カ月を超えてはなら
ないとされているが、子どもの処遇が決
まらず、長期間にわたって保護される
場合も少なくない。

※3 「スペースX」は、ロケット・宇宙
船の開発・打ち上げなどの商業軌道輸
送サービスを、「テスラ・モーターズ」
はバッテリー式電気自動車と電気自動
車関連商品を開発・製造・販売してい
るアメリカ合衆国の企業。